岡倉覚三（天心）と英文学

岡　倉　登　志

岡倉覚三（国内では最初ペン・ネーム，後に号として用いた天心で知られる）は，文久2年12月（西暦1863年2月＝多くの伝記が1862年12月としているのは誤り）生まれで，大正2年（1913年）9月に没しているから，人生の大半を明治に生きた。彼の文学好きは近年では比較的良く知られている。たとえば，英文学・英語学の斎藤兆史東大教授の『英語達人列伝』にも紹介されている坪内逍遥，高田早苗らとの神田小川町の牛肉屋における文学談義では，ユーゴー『レ・ミゼラブル』，デュマ『モンテ・クリスト伯』（いずれも英訳），それにスコット『アイヴァンホー』が話題の中心であったと伝えられている。

覚三は短期間フランス語を履修しており，その並みならぬ英語力からすれば，ある程度のフランス語力も持ち合わせていたであろう。覚三と少なからぬ縁のあった哲学者九鬼周造の回顧談によれば，コレージュ・ド・フランスの教授をしていたベルグソンの哲学講義を覚三が聴講したことがあるという。天心の日記から1908年1月28日に聴講したことが判明した。

しかしながら，ロシア語によるトルストイの作品にせよ，前述のユーゴー，デュマ，ゾラらフランス文学も，基本的には丸善で購入したり，東大図書館で借りた英訳書を読み耽った。欧州旅行(1887年）中に読ん

だアルフォンス・ドーデ『タルタランのタラスコン』はフランス語の可能性もある。ちなみに，『天心全集』5巻の「欧州視察日記」(ほとんどが英語で記載) のこの個所の邦訳は「覚三がアルプスに登った」という全くの誤訳である。また，同じ日記には，ジュネーブからチューリッヒまでの列車でゲーテの『ファウスト』を読んだと記されている。

覚三の文学論の「さわり」

覚三の英文学の読書傾向を知る手がかりは，いくつかある。すぐに手に取ることが出来る覚三の著作では，『茶の本』(原書は*The Book of Tea*として1906年に刊行) が最適であろう。その次には『天心全集』平凡社版に収められている論稿や書簡によることである。直接文学を論じたものとしては，同窓生の高田か坪内に依頼されて行なった談話で，『早稲田文学』第7年第1号 (明治30年10月3日) に掲載された「文学局外観」がある。(『天心全集』3巻所収)。その要旨を以下に引用しておく。

幸田露伴君〈覚三の若き友人〉の作品は，諸方面にふれていてindividualityがあってpassionが鋭く読者を感動させるが，それは未だ時潮を著しく表白し，現社会の肺腑に出入りしているためとはいえない。尾崎紅葉君の『多情多恨』はたしかに一大問題を捉えているが，その根本思想の幅が今一段と深大であったなら，当代の[ゲーテの]ドイツの『ウエルテル (若きウエルテルの悩み)』のようになっていたであろう。

ゾラは一部からみれば純然たる写実主義，自然主義とも見えるが，彼のルーゴン家系の遺伝を諸種の方面より描いて大問題を具象にせんと努めたところはidealist(理想主義)であると思われます。トルストイも同じくである。ヂツケンズ [ディケンズ]，サッカレーもまたこの点から見ればidealistと申して差支ないかと思う。

日本ではまだ小説の体(てい)が十分に発達していないように思いますが，第一にユーモル［ユーモア］の作がない。あってもまだ発達していない。スコットのようなシブリーの思想を描いたものは馬琴［『南総里見八犬伝』を著わした江戸期の滝沢馬琴のこと］以来ほとんどいない。サッカレーの『ヴァニティー・フェアー（虚栄の市）』とか，ユーゴーの作のようなものもない。私は西洋に現れたほどの小説の体を一通り皆日本に現わしてもらいたいのですが，それには外国のstandard workという程の作を翻訳する必要はないでしょうか。

『茶の本』に登場する英文学

『茶の本』に登場する英文学としては，まずはシェークスピアがあげられる。近松門左衛門を「我国の沙翁」と比喩している天心は，我国最初のシェークスピア研究者である坪内逍遥と同じく，ホートンからシェークスピアの手解(ほど)きを受けたのであろう。『茶の本』の邦訳の多くからは伝わらないが，第一章の「茶の湯」の伝統を弁護している一節には，シェークスピアの戯曲のタイトルを織り込んだ地の文がある。ここでは岩波版の村岡博の名訳を引き，英文を付けておきたい。

> 「よその目には，つまらぬことのように騒ぎ立てるのが，実に不思議に思われるかも知れぬ。一杯のお茶でなんという騒ぎだろうというであろうが」。
>
> The outsider may indeed wonder at this seeming much ado about nothing. What a tempest in a tea-cup!

英文学学習者には説明に及ぶまいが，much ado about nothing は「か

ら騒ぎ」のことであり，２行目は，a storm in a tea-cup が通常の慣用句であるが，天心はシェークスピアの作品を意識して storm の代りに tempest を用いたのである。前述したように，天心にとっては，良質の小説にはユーモアが不可欠であり，『茶の本』に登場する茶人＝風流人とは英語でいえば humourist であることが必要条件であった。

『茶の本』にも登場するチャールズ・ラムは，かつては旧制高校で副読本として読まれたが，現在では英文学専攻生もあまり読まなくなった作家と思われる。彼は姉との共著『シェークスピア物語』を児童向けに書いており，シェークスピアにも劣らないユーモリストであった。昭和の英文学会で影響力をもち，天心の弟で英文学者であった由三郎の高弟，福原麟太郎は，ラムをシェークスピアとともに英国最大のユーモリストとしている。(福原麟太郎著作集11巻)。そして，「ラムの魅力を教えてくださったのは由三郎先生であった」とも回顧している。愚人を愛したラムは，自らにも道化性を見いだしたり，バイロンの『ドン・ジュアン』を好んだ天心お気に入りの作家であったかもしれない。

いずれにせよ天心は，ラムが「ひそかに善を行なって偶然にこれが現れることが何よりの愉快である」というところに茶道の真髄があるとし，それを理解している人たちについてこう述べている。「茶道は美を見いださんがために美を隠す術であり，この道はおのれに向かって，落ち着いてしかし充分に笑う気高い奥義である。したがってヒューマンそのものであり，悟りの微笑である。真に茶を解する人はこの意味において茶人といってもよかろう。サッカレー，シェークスピアはもちろん，文芸頽廃期の詩人もまた，物質主義に対する反抗のあまりいくらか茶道の思想を受け入れた」。

この最後の行(くだり)は，天心の美術運動の精神を理解するための一つのキー・ワードになっていると素人なりに感じているが，それを解くため

には，ラファエル前派やその支持者であったラスキンやウイリアム・モリスとの橋渡し役となったニュー・イングランドのラファージらの活動を紐解く必要があろう。ラスキンの名は天心の講演にも，「高名な英国の美術批評家ラスキン」として登場している。

バイロンの名前が出たが，ロマン派の代表的詩人で1823年のギリシャ独立戦争に身を投じた結果，熱病死したバイロンその人の生き方に天心が共鳴していたことを示唆する文章を由三郎が『茶の本』はしがきに記している。それはイギリス帝国主義下にあったインドにおける20世紀初頭の天心，すなわち『東洋の目覚め』や『日本の目覚め』をパッションをもって執筆していた当時[1]のインドの独立の志士たちと連帯したころの姿である。

これに関連して，大岡信は『岡倉天心』朝日選書のなかで，「インドの天心は，少数者の蹶起の思想といい，階級問題に対する無感覚ぶりといい，華麗な想像の翼を過去の歴史のあちこちに奔放に羽ばたかせて，感激的な表現にそれを結晶させる個性といい，まさにバイロンの徒であって革命の冷静な実行家ではなかった」と述べている。ちなみにこれに関する論稿として岡倉古志郎「天心とベンガルの革命家たち」『祖父岡倉天心』中央公論美術出版があるが，まだ実証不足であり，筆者自身の今後の検討課題と考えている。

以上に引用した他に，名前が登場する英文学の大物としては，18世紀に活躍した文豪で『英語辞典』や『シェークスピア全集』で知られるサミュエル・ジョンソンの「食事を薄くするために20年間もの間，一日何十杯の茶を飲んだ」との”懺悔”が記されている。名前は表に出てい

[1] 当時とは1902～4年のことであるが，『東洋の目覚め』はノートであり，本として刊行されるのは天心の死後である。したがってP.H.Pから最近刊行された『日本の目覚め』の訳者解説「1904年に刊行された『東洋の目覚め』」は明らかに誤りである。

ないが，もう１人の18世紀に活躍した有名な作家の一文が『茶の本』に引用されている。その作家はアイルランド人だが，英文学に含められているジョナサン・スウィフトである。彼をユーモリストに含めるのは気がひけるが，彼がブラック・ユーモアあふれる諷刺屋であったことを否定する人はいまい。

スウィフトの引用部分も，やはり第一章である。西洋人は，日本が平和な文芸にふけっていた間は，野蛮国とみなし，満州の戦場で大々的殺戮を行ない始めてから文明国と呼んでいる」との有名な一節の少し後で，「西洋の諸君，われわれを種にどんなことでも言って楽しみなさい。アジアは返礼いたします」として，スウィフトが1729年にしたためたイングランドのアイルランド抑圧政策に抗議するパンフレット“A Modest Proposal”を引いているが，邦訳では，「諸君には着物のどこか見えないところに，毛深い尻尾があり，しばしば赤ん坊の細切れ料理を食べていると昔の文人がそんなことを言っている」程度にとどめられている。

天心のアイルランドへの関心やその知識は，ラフカディオ・ハーンとともに正確な東洋イメージを伝えている『インド生活』の著者として『茶の本』にも登場し，*The Ideals of the East*（邦訳『東洋の理想』）の共著者的役割を果たしたニヴェディッタ（本名マーガレット・サミュエル・ノーブル）によるところが少なくないであろう。しかしながら，もう一人忘れてならない人物がいる。それは７歳年長だが東大の同級生で，天心の親友であった福富孝季（号は臨淵）である。土佐の志士の末裔ともいえるこの人物と天心は，「小西湖畔」と呼ばれた森春濤漢詩結社で大いに呑み，語り合った仲であった。1887年には共に初めての洋行でロンドンで落ち合っている。その時の思い出を天心は，政治的理由により自害した親友への追悼文においてこう述べている。「愛蘭（アイル

ランド）党の衆合運動を催すや，君はトラファルガー・スクエアの石上に露臥して，貧民と難苦を共にして，不幸を慰籍せり」。1887年は女王の即位50周年［ゴールデン・ジュビリー］の年であったが，その数年前よりアイルランドに自治権を与えるかをめぐる「ホーム・ルール問題」と小作料・地代問題がイングランド議会でも盛んに論じられていた。

次に『茶の本』から離れて，大衆小説について述べておこう。家庭での天心のエピソードとして，講談調でコナン・ドイルのシャーロック・ホームズの話をしたことが知られているが，同様に，ボストン出身のアラン・ポーの怪奇小説のさわりを語ったようであり，これは息子の一雄にも受け継がれた。孫の古志郎も推理小説好きであった。天心のホームズへの思い入れは月並ではなく，現在に生きていれば，ホームズ協会の試験を受けてシャーロキアンとなっていたであろう。それを示す知られざる実話として2度目か3度目のロンドン訪問の際に，ドイルに面会を申し入れる手紙を書いている。残念ながら，ドイルの地方出張のために天心の願いは実現しなかった。

天心とワーズワース

この小論の結びは，今までほとんど知られておらず，村形明子京都大学名誉教授が「発見」されたといっても過言ではない，19世紀前半に活躍したイングランド北部の湖水地の詩人で，詩人哲学者と呼べそうなワーズワースへの天心の関心の紹介で終わる。なぜならば，天心自身も詩人であり，大岡信の表現を借用すれば，作品としての詩を書く詩人かつ存在そのものも詩人であり，哲学者であったと思う。道教的な中国哲学のみならず，ヘーゲル哲学も学んでいたし，九鬼周造の「粋の構造」

には“天心哲学”の影響が見受けられないであろうか。もちろん，美学は哲学の一領域である。これも筆者の手に負えるような課題ではないから，読者のどなたかがご教示いただければ幸いである。

また，最近邦訳がでたパーマー『環境の思想家たち』には，天心と関係のあるタゴール，ラスキン，ライトらと一緒にワーズワースが取り上げられているが，『茶の本』とりわけ花の章は，天心をも環境の思想家に含めてよいのではと思わせる。いいかえれば，自然観という観点から天心を考察すれば，必ずワーズワースと天心との関係も考察しなければならないであろう。また，素人目にはマサチューセッツ州の住人であったソローも，エマソン同様に天心に影響力をもっても不思議でないのだが，そのような言及はみられない[2]。ただし，「ソローはユーモリストではなかった」という指摘（池田久代「岡倉天心と英文学」『鵬』創刊号，2004年９月）は，天心がソローの影響を受けなかったことを示唆しているともとれなくはない。

天心のワーズワースへの関心を明らかにしているのは，フェノロサの二度目の夫人で本人も詩人でもあったメアリーである。最初の夫人と離婚したフェノロサと再婚したメアリーは，1896年７月に来日し，同月21日に帝国ホテルで夫の高弟ともいえる天心と初めて会った。それから２カ月後に京都で再会し，天心は日本での再就職を望んでいたフェノロサに新設された京都大学での比較哲学教授ポストの話をしたという。もちろん，ビゲロウと共に２人が天台宗の菩薩十善戒を授かった琵琶湖畔の三井寺法明院の話題も出たであろう。

それからさらに歳月が経過し，日本復帰が容易ならざることが明らか

---

[2]『茶の本』の訳者，解説者であり，*OKAKURA KAKUZO and BOSTON*でミシガン大学より学位を授与された立木智子前横浜市大教授より天心がエマソンとともにソローにも言及した演説があるとの示唆を本稿執筆後に得た。

となり，フェノロサ夫妻は一時帰国することになった。11月４日の送別の宴，翌５日は狩野芳崖命日に続き，７日（山口静一『フェノロサ』下では６日）には横浜から日本を出帆する日に夫妻を見送りにきた天心との会話のなかにワーズワースへの天心の関心の強さが語られている。その会話の内容をメアリーの日記よりかい摘んで紹介しておこう。

「私たちは将来の共同研究，共同事業 ― 古（いにしえ）の杭州の湖畔におけるような琵琶湖学派創立［フェノロサは大津絵にも強い関心を抱いた］の大いなる夢を語り合った。岡倉は唐崎の松に寄せた私の詩を大そう誉めてくれた。彼はワーズワースが好きで，「不滅の頌歌」immortality song の邦訳絵入り豪華本を作ることを考えている。彼とＥ［フェノロサの名前アーネストの頭文字］は，二人の合同講演，芸術，人生，宗教など多くを語り合った。彼は私たちの旅に同行しなければならないと叫んだ。小さな曳き船の上に立ってじっとＥを見つめ，見つめ返すＥの目に涙の溢れていたことを私はけっして忘れない」。